

二〇一七年九月一五日

藁葺き家沈む棚田の彼岸花
蟋蟀の輪唱やまず夜は更くる
霧襖より現る始発電車かな
黒潮の風に育ちし蜜柑山
ビルあひの小さき草むら鉦叩

よう子
あさこ
さつき
恵三
はく子

二〇一七年九月一四日

海峡の空真つ青や秋燕
新米や先ずは離れて暮らす子へ
曲り屋の縁に並べて菊手入れ
一溪を覆ひ尽くして真葛原

やよい
ともえ
智恵子
せいじ

二〇一七年九月一三日

鎖されし法の裏門葛の花
登り来し六甲山頂霧の海
堆く新藁積まれ納屋匂ふ
萩葎より鯖猫の顔現るる
夫の忌を修して安堵鉦叩
参磴の歩みがたしや乱れ萩
漣に揺るる白雲秋の池

満天
やよい
智恵子
なつき
はく子
ぽんこ
こすもす

二〇一七年九月一二日

高鳴れる水の匂ひに稲実る
青空を貫かんとす秋燕
峰涼し眼下に蒼き茅渟の海

宏虎
有香
菜々

二〇一七年九月二一日

起伏野の続く限りに蕎麦の花
慰霊碑にぬかづきをれば秋蝶来
橋桁に記す目盛りや水澄めり
五感研ぎ澄まして里の秋を聞く
きちきちを先立たせをる試歩の杖
思い人待つやに月の出を待ちぬ

宏虎
やよい
こすもす
たか子
うつぎ
ともえ

二〇一七年九月一〇日

秋日射す暈に動く木々の影
碧天に一刷け白き秋の雲

三刀
満天

二〇一七年九月九日

澄む水の日だまりに群る稚魚の影
朝日浴び稲穂輝く明日香道
名を呼べば応え鳴く猫秋の夜

ぽんこ
明日香
治男

毎日句会みのる選・二〇一七年九月一七日